第 3 章　西トップ遺跡にみられる上座部仏教に属する新たな要素

奈良文化財研究所　佐藤由似

はじめに

既往研究において、西トップ遺跡は、碑文から 9 世紀にはじまり、アンコール王朝崩壊後のポスト・アンコール期にあたる 15，16 世紀まで存続すると考えられていた。しかし、これまで具体的な考古学的研究は皆無であり、M. ジトーと A. トンプソンによる図像学的見地に基づいた研究が評価されている (1,2)。近年の奈良文化財研究所によって、西トップ遺跡に関する考古学、建築史学ならびに保存科学各分野からの調査が遂行され続けている (3)。とりわけ、西トップ遺跡においてはアンコール王朝末期に当たるポスト・バイヨン期以降に属する遺物や建築装飾が多く、特筆に値する。たとえば、ペディメントに表された触地印仏陀坐像や北祠堂偽扉にみられる仏陀立像などは、西トップ遺跡を代表するポスト・バイヨン期以降に属する図像であるといってよいであろう。これらの図像はアンコール地域に上座部仏教がもたらされたごく早い段階に属する可能性がある (4)。しかし、祠堂本体構造の不安定化等々、様々な要因が重なり、三祠堂の解体修復作業を執り行うこととなり、第一段階として南祠堂の解体が作業が始まった。この解体作業に伴って、新たな発見がみられたので、ここに紹介したい。

第 1 節　南祠堂基壇から発見されたセマ石

現在みる西トップ遺跡は、中央祠堂とその両側に南祠堂と北祠堂が並び、中央祠堂の東正面にはテラスが張り出している。これらすべての祠堂群を取り囲む形でラテライトの石列とセマ石が寺域を形成している（図 1）。セマ石はラテライト石列の四隅と各辺の中央に配置されていることが、これまでの調査で判明している。一連の南祠堂の解体作業に伴い、新たに上成基壇と下成基壇構成材から複数のセマ石が発見された。

これらのセマ石は上成基壇のうち N12 から 3 石（図 2）、N14 から 2 石（図 3）、N15 から 3 石（図 4）、N16 から 5 石（図 5）、下成基壇の N24 から 2 石（図 6）が確認されている。各石材の寸法等詳細は『南祠堂解体作業中間報告 1』(4) に詳しいが、今回南祠堂から発見されたほぼ全てのセマ石は頂部が 3 つに刳り込まれた様式で (図 7)、地上にでる部分は丁寧に成形されるが、地中に埋もれる基部は未整形である。現在西トップの寺域を形成するセマ石の頂部には刳り込みがなく、全体が蓮弁を象ったような砲弾型の形を呈しており、今回発見された頂部が 3 分割されるセマ石とは様式を異にする（図 8）。

これらのセマ石は一見乱雑に組み上げられているように見えるが、基本的には基壇の階段部付近、すなわち出入口として重要な位置を中心に配置されているようにも見受けられる。この傾向が顕著なのが N24 である。N24 で発見されたセマ石は明らかに、南祠堂下成基壇階段最下段の直下に据えられており、意図的に配置された可能性が推測される。セマ石は元来、仏教と密接に関係し、仏教寺院や仏教テラスの寺域を形成する宗教的な意味を持つ石である。南祠堂では転用材としての利用ではあるものの、セマ石のもつ信仰・宗教的な意味合いを保持したまま配置され、南祠堂に組み込まれたものと考えられる。

南祠堂から発見された 14 石のセマ石は、転用材として認識することが可能であるが、どの遺跡からもたらされたものかに関しては判然としない。しかし、南祠堂建立時期が 14 世紀代を上限とする時期に比定できることから、少なくともそれ以前にセマ石がどこかの上座部仏教寺院または仏教テラスに使用されていた可能性を示唆するものである。すなわち、上座部仏教のアンコール地域への流入が 14 世紀代を遡る可能性が出てきたと考えられる。

カンボジアにおけるセマ石の型式分類については、先述のジトーによる先行研究が唯一であるが (6)、中世以降の上座部仏教寺院に伴う装飾性の高いセマ石を中心としているため、アンコール王朝末期やアンコール・トム内に見られる仏教テラスのセマ石を詳細に分類したものではない。そこで、現段階における初期的な作業として、アンコール・トム内に位置する仏教テラスと呼ばれる主なテラス寺院のセマ石を列挙し、西トップ遺跡のセマ石と比較することとした。アンコール・トム内にある全てのセマ石を捉えたものではないが、大まかに見て、地上露出部分の形態の差で 3 タイプに分類することが可能なようである。便宜上、仮にタイプ A、B、C と本稿では呼ぶこととする。タイプ A は頂部が 3 つに分かれるもの、タイプ B は砲弾型を呈した装飾性の低いもの、タイプ C は砲弾型の頂部に蓮の蕾が載るものである。この差異が年代差に拠るかは現段階では結論付けることは時期尚早である。しかしながら、西トップ遺跡におけるセマ石のうち、南祠堂内から発見された 14 個体はタイプ A、西トップの寺域を形成する原位置に据え置かれたセマ石はタイプ B にあたる。アンコール・トム内テラス寺院のうち、タイプ A は Kok Thlok（図 9）、タイプ B は Tep Pranam（図 10）、Vihear Prampil Loven（図 11）、タイプ C が最も多く、Preah An Thep（図 12）、Preah Ngok（図 13）、Vihear Prampil Loven（図 14）、Vihear Prambuon Loven（図 15）、Preah Pithu（図 16）であった。Vihear Prampil Loven には 2 タイプ見られた。

今回西トップ遺跡南祠堂解体に伴って、新たなセマ石が発見されたことにより、セマ石研究がアンコール・トム内における上座部仏教寺院の形成過程ならびにポスト・バイヨン期からポスト・アンコール期にかけての移行期に関する様相解明に向けた重要な要素になるといえよう。

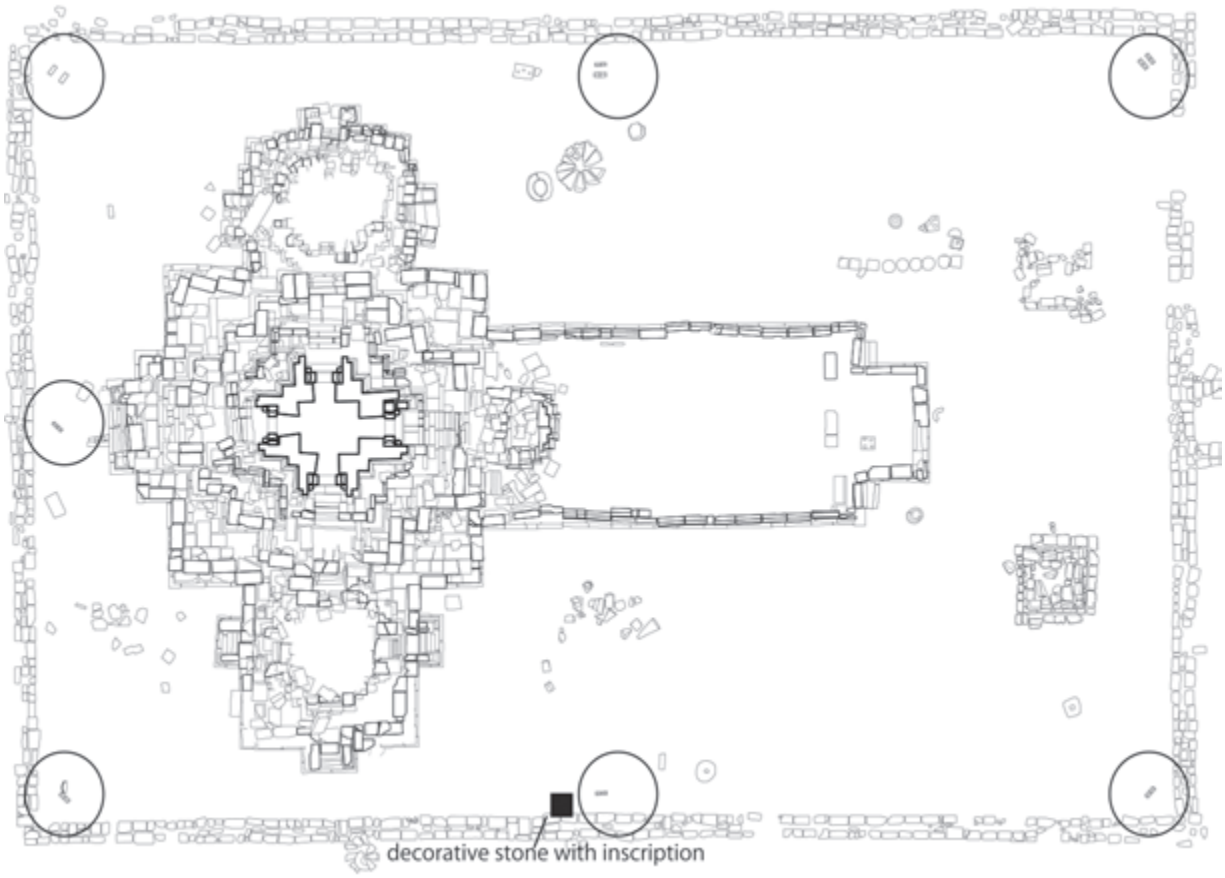

図 1　西トップ遺跡セマ配置図

図 2　南祠堂 N12 セマ配置図

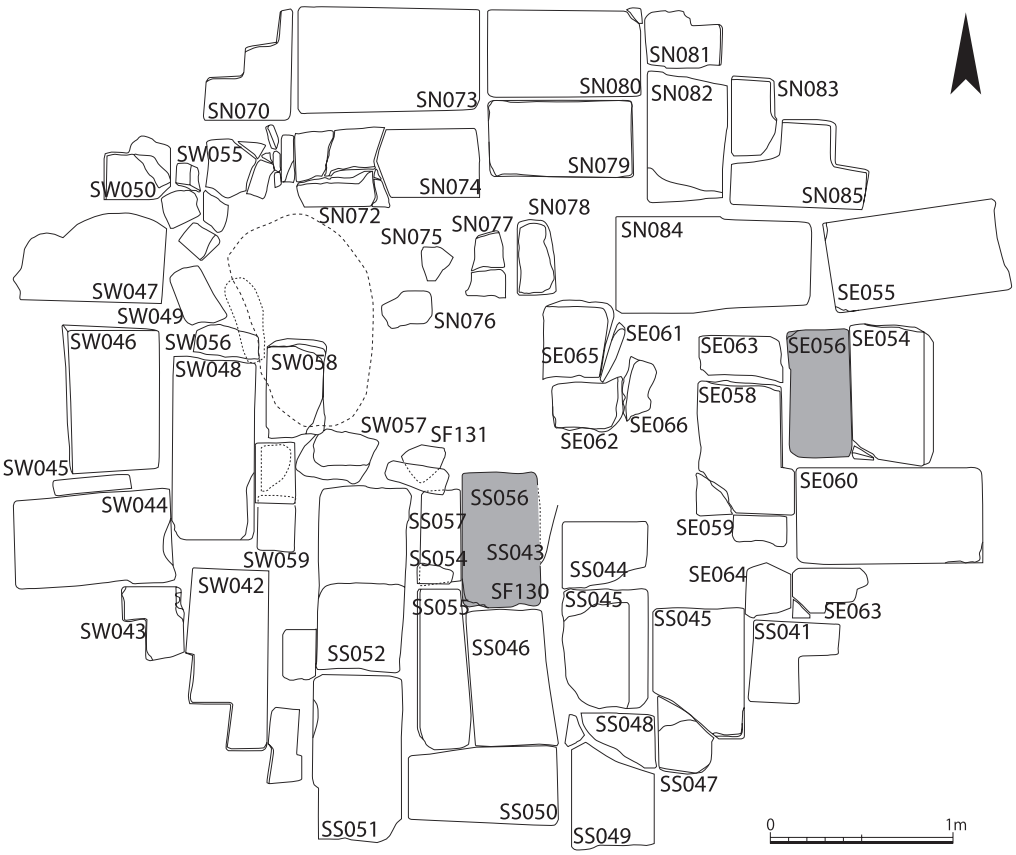

図 3　南祠堂 N14 セマ石配置図

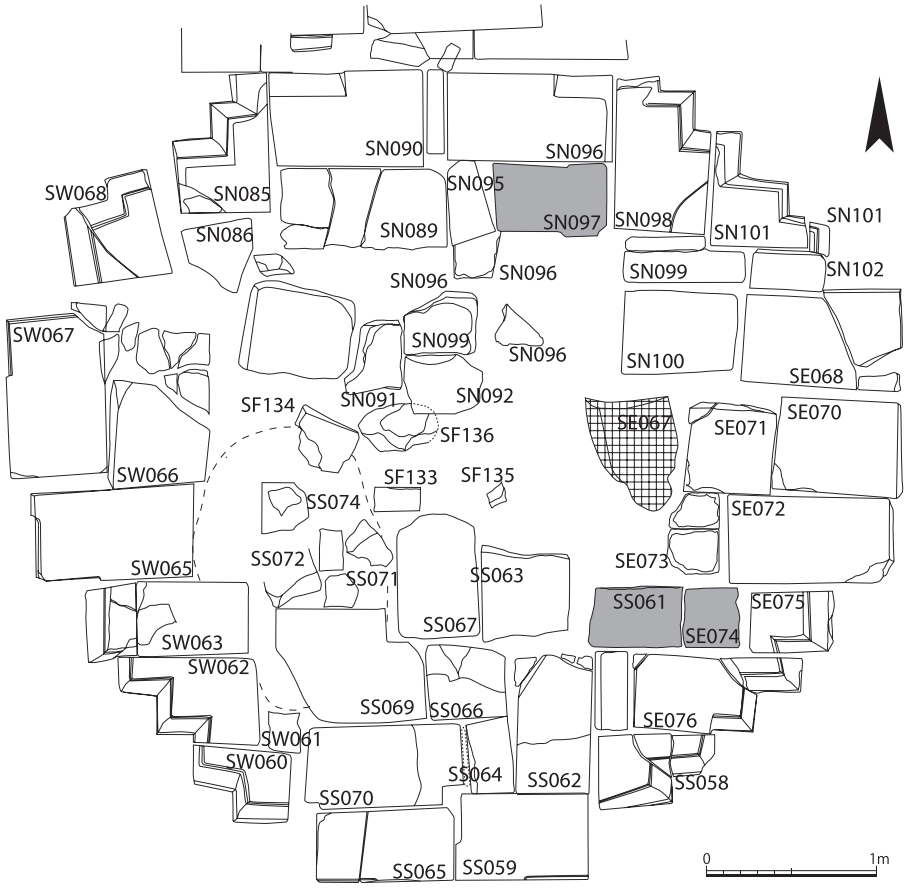

図 4　南祠堂 N15 セマ石配置図

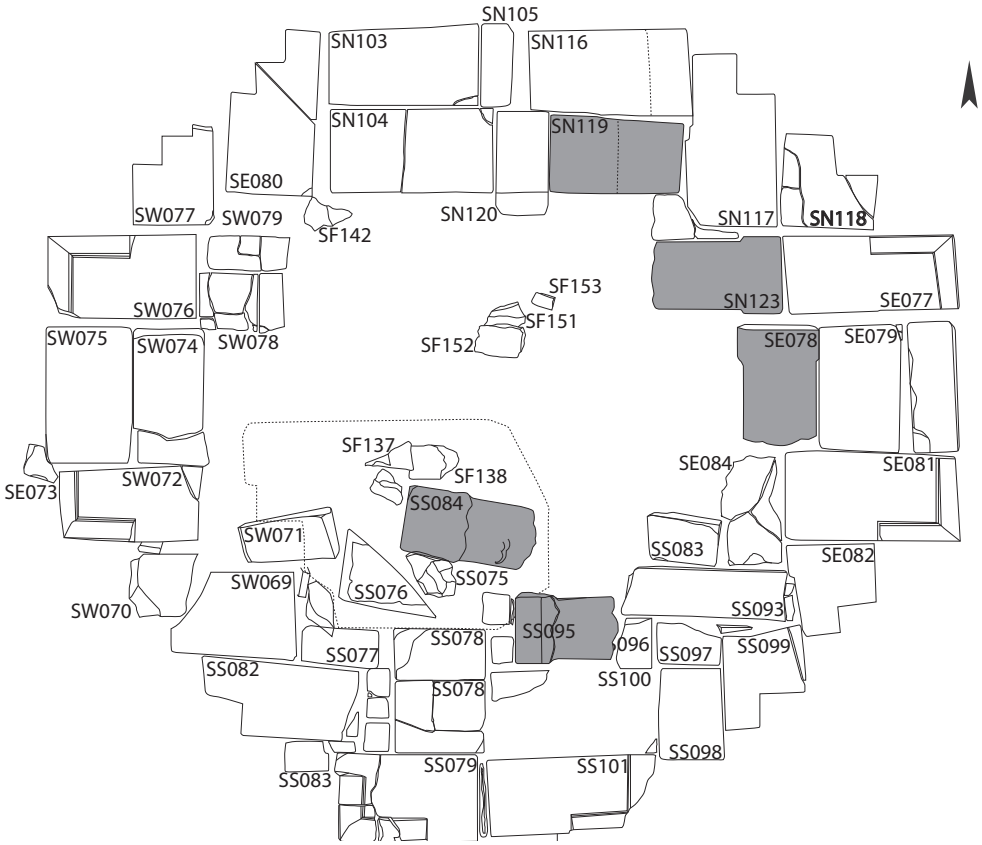

図 5　南祠堂 N16 セマ石配置図

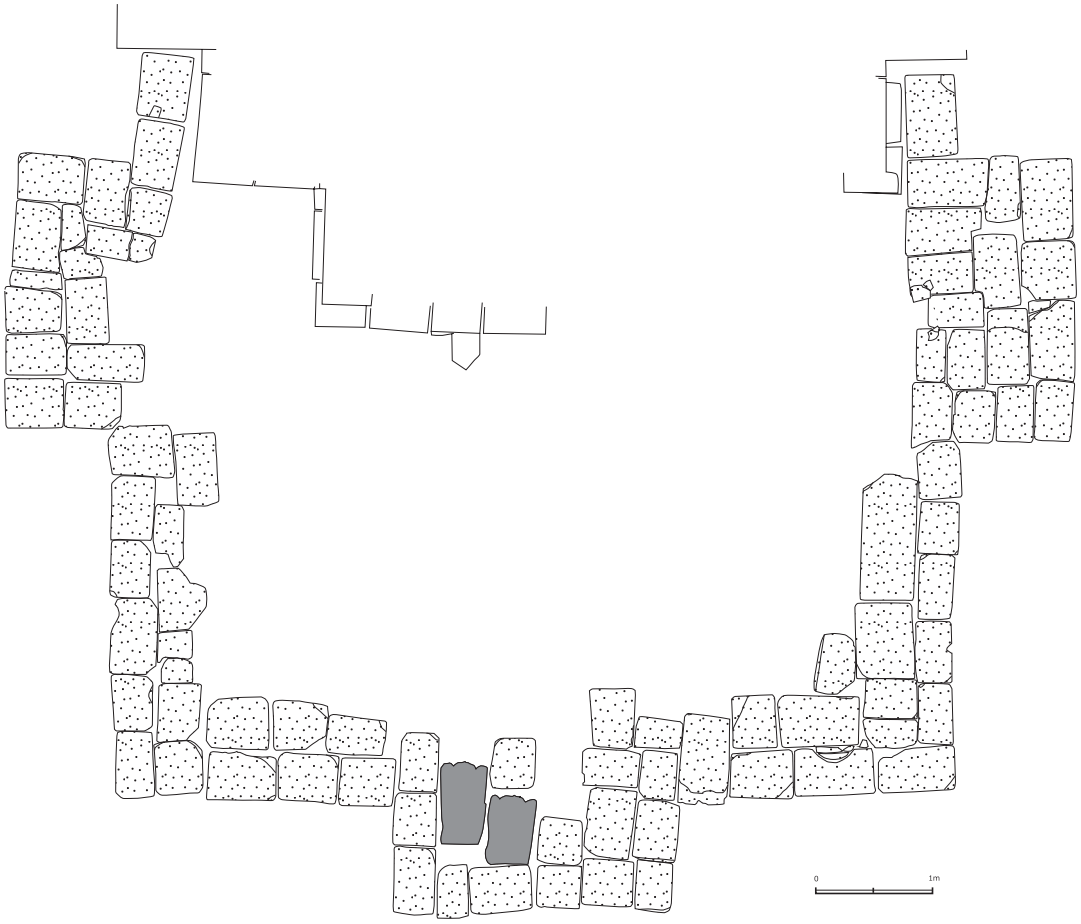

図 6　南祠堂 N24 セマ石配置図

図 7　南祠堂 N23 セマ石検出状況（南から）

図 8　西トップ遺跡北辺中央セマ石現状写真

図 9　Kok Thlok セマ石

図 10　Tep Pranam セマ石

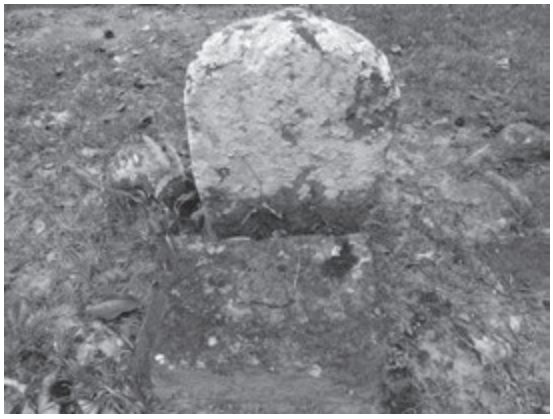

図 11　Vihear Prampil Loven セマ石 1

図 12　Preah An Thep セマ石

図 13　Preah Ngok セマ石

図 14　Vihear Prampil Loven セマ石 2

図 15　Vihear Prambuon Loven セマ石

図 16　Preah Pithu セマ石

第 2 節　碑文を伴う装飾砂岩の発見

2012 年 7 月 24 日、修復作業に伴う新たな基準杭の設置作業中に、碑文を伴う砂岩製の装飾石材が発見された。南辺中央のセマ石のほど近く、現地表面から 10㎝ほど掘り下げた位置に据えられていた。

蓮弁を象ったような装飾で縁どられ、、発掘時の上面には長方形のほぞ穴が開けられていた（図 17）。丁寧に取り上げ、裏面を確認すると、1 行の碑文が確認された（図 18）。石材は最大長 66.3㎝、最大幅 45.3㎝、高さ 11.5㎝で、重さは約 40kg を測る。用途については定まった見解を出すことはできないが、碑文面を上面とした供献用の石材かまたはほぞ穴面を上面とした仏像か何かの台座であった可能性などが考えられる。現段階では、当遺物のような装飾を施した石材の類例はどの遺跡からも確認されていない。

碑文の内容については前章において Sovannnara 氏も触れているが、解釈としては下記のようになると現段階では考えている。

原文読み：dakkhiṇe kassapo buddho
英訳：Kassapao in the south
和訳：「南の迦葉仏」

字体から、おそらくアンコール王朝末期以降中世にかけての碑文だと推測される。

迦葉仏とは過去七仏の 6 番目に当たり、最初の三仏を過去荘厳劫三仏、後の四仏を現在賢劫四仏と呼ぶ。過去七仏の七番目は釈迦牟尼、これに加えて八番目は弥勒菩薩となる。現代カンボジアにおいては賢劫四仏に弥勒を加えた信仰がみられる。四仏はたびたび方位を伴うことがあり、弥勒を中心に据え、各東西南北に四仏を配置するもので、迦葉仏は通常南に配置される。実際、西トップ遺跡から発見された当遺物もラテライト石列の内側、南辺中央のセマ石付近から発見されており、南を意識して配置された可能性が考えられる。

四仏の類例としては、現在のミャンマーにあるバガンにおいて四仏が広く信仰されていたことが知られている（7）。一方カンボジアにおいては、アンコール王朝最盛期に四仏信仰が盛んになったという記録や類例はないが、王朝末期からポスト・アンコール期にかけて四仏信仰が浸透していた可能性が推定される。その最たる例がアンコール・ワット第三回廊中央祠堂の四仏立像である。アンコール・ワットは当初ヒンドゥー教寺院として建立されたが、中世に入り上座部仏教寺院へと改変された。その象徴的な変化が中央祠堂の主尊をヴィシュヌ神像から四仏立像へと変えたことであろう。アンコール・ワットの他にもワット・ノコールなどでも確認される (8)。

西トップ遺跡で発見された南の迦葉仏という碑文は、西トップ遺跡自体も四仏思想に組み込まれていた可能性を示唆しているのではないだろうか。あくまで、現段階での試論に過ぎないが、中央・南・北の三祠堂群を中心として、すなわちこれら三祠堂群を弥勒菩薩とみなし、その東西南北に四仏が配置されたのではないだろうか。前章の Sovannnara 氏による論考にあるように、今回発見された石材のほかに、全く同様の装飾を施した石材の破片が発見されているが、碑文の数文字がかろうじて読み取れる状態である。今後の調査によって残りの破片を発見することができれば、碑文の内容をさらに知り得ることに繋がると予想される。本発見は、王朝末期以降の初期上座部仏教の痕跡を示す貴重な事例であり、カンボジアにおける初期上座部仏教の様相解明にむけた新たな一歩となったといえよう。

参考文献

1)G. Madeleine 1975 *Iconograpihe du Cambodge Post-Angkorien*, Paris,pp113-116
2)A. Thompson 1996 *"The Ancestral cult in transition: reflection and spatial organization in Cambodia's early Theravāda Complex."* Southeast Asian Archaeology 1996
3) 奈良文化財研究所 2011『奈良文化財研究所学報第 88 冊　西トップ遺跡調査報告―アンコール文化遺産保護共同研究報告書―』
4) 佐藤由似　2013「アンコール王朝末期における図像研究の一視点―西トップ遺跡史料とその類例に関する比較研究―」『南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究』pp99-105
5) 奈良文化財研究所 2014『西トップ遺跡調査修復中間報告　南祠堂解体編』
6)G. Madelaine 1969 *Le bournage ritual des temples bouddhiques au Cambodge.* Paris, École Française d'Extrême-Orient
7) G.H. Luce, 1969*, Old Burma - Early Pagan, 3 vols.,* New York
8) A. Thompson. 1998 *"Lost and Found -The stupa, the four-faced Buddha and the seat of the royal power in Middle Cambodia-"* Southeast Asian Archaeology 1998

図 17　石材出土状況（北西から）

図 18　碑文面

図 19　ほぞ穴面

図 20　俯瞰写真